



五十年の昔・攝津大塚

▲筆者の生家は大阪市西區土佐堀裏町一今の土佐堀船町であつて、腕白盛りには此の生家で起居してゐた、巨匠攝津大塚も同じ町内の人であり、町内會に天明會といふのがあつて大塚も筆者の父も町内會員の關係から大塚も父と交際が深く、大塚が拙宅を訪れると筆者の頭を撫でてゐたものだ。

木村久治郎氏壯行

浪花素義界で美聲と技巧をもつて謡はれ、女義の泰斗竹本小仙師の薫陶でいよいよ名聲昂る木村久治郎氏は南方開拓の鵬圖をいだし、南ボルネオのバリツクババンに移りて大東亞建設の一員たるべく決し、諸般の準備も整ひ四五名の同志と共に従業員を引具して出發さるゝこととなつたが、小仙連は氏の雄圖に滿腔の祝意を表し且つ氏の行を壯ならしむるため郊南玉手の松半に祖道の宴を催し杯を舉げて木村氏の健康を祈つた。

上掲の寫眞は右より西村舟樂、鎌田駒半、木村久治郎、竹本小仙、住山三幸、永田春洋、樋口吾笑の諸氏

▲その頃の大塚は越路大夫の名で御靈文樂座に出演しその人氣は飛ぶ鳥も落すほどの勢ひで、大阪の淨瑠璃界を風靡してゐた、筆者は幼な心にも此の人氣者が同じ町内に在ることを私に悦び誇りとしてゐた。

▲筆者の遊び場所は御靈さんであつたので、途中でよく大塚と顔を合せることがある、すると大塚は「ボン文樂へおいでんか」とよく誘ふので筆者は黙々と隨行するとケライの一人が文樂の木戸から筆者を入場せしめる、八才か九才の子供だから淨瑠璃などは理解できやう筈はないが、人形の動きが無性に興味を曳いて面白く觀覽してゐた。大塚も屢々筆者を無料で文樂を見せるので、遂には平氣で木戸御免。

▲それも五十年の昔であつた、大塚も逝き、その頃さの大夫と云つた後の越路大夫も今は亡し、然し當時流行の吾妻コートを着て多くのケライを引具して徒歩で樂屋入した大塚の大きな潤ひのある眼、太い／＼眉毛が今も印象として記憶に存してゐる。（霞村）